

9. 歴史民俗資料学研究所・日本常民文化研究所

歴史民俗資料学研究所**【現状説明】**

現在、本研究科には、博士前期課程26名、博士後期課程31名の合計57の大学大学院生が在籍している。それに対して施設面では大学院生研究室6室（1室に8名が入室）、演習室1室、共同研究室2室（内1室は事務室兼教員用会議室としても利用）、図書室1室、資料室1室、実験・実習室1室がそれぞれ確保されている。全床面積は、約830㎡となる。大学院生研究室については、希望者に限り机と机との間に可動壁を設置して個人のプライバシーを保護している。なお、資料室と実験・実習室は、2007年度に空調設備の工事を行ったので、収納している史資料等を傷める危険性は皆無に近いものとなった。

上記の本研究科の部屋については、耐震工事も完了済みである。また、すべての部屋において冷暖房施設が完備している。各部屋は、通常時はもとより休日や長期休暇中も事前の所定手続きを済ませておけば、希望者はいつでも利用でき、冷暖房も使用できる。さらに、大学院生が主に活用する共同研究室が1室設けられており、大学院生相互の研究打ち合わせや懇談に大いに利用されている。このほか、本研究科に属する部屋ではないが、特定の学部に必要な基礎を置かない本研究科の母体となった日本常民文化研究所が管理する古文書修復実習室などを利用できることは、特色ある授業を行う上できわめて有効な条件となっている。

次に本研究科に必要な機器・備品類は、まず、視聴覚機器類としてカラーテレビ、スライド映写機などがあり、情報処理機器類としては、パソコン、ビデオカメラ、デジタルカメラ、1眼レフカメラなどがある。さらに、本研究科の研究に固有な特殊機器類としては、大型マイクロカメラ、マイクロリーダープリンター、レーザープリンターなどが揃えられている。

図書についても、本研究科の場合、図書・史資料の収集が発足当時から課題であったが、開設以来15年間、予算の最優先事項として集書に努めてきた。その結果、十分とは言えないものの、蔵書、史資料の次第に増えつつある。ここ4、5年の年間図書購入予算は300万円ほどであり、その所蔵量は約9,000冊（うち寄贈図書は約1,800冊）。ここ5年間の予算購入冊数は下表の如くになる。

購入図書冊数の推移（2003～2007年度）

| | 2003年度 | | 2004年度 | | 2005年度 | | 2006年度 | | 2007年度 | |
|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|-----------|-----|
| | 支払額 | 冊数 | 支払額 | 冊数 | 支払額 | 冊数 | 支払額 | 冊数 | 支払額 | 冊数 |
| 予算額 | 3,250,000 | | 3,300,000 | | 3,000,000 | | 3,000,000 | | 3,000,000 | |
| 購入額 | 3,250,000 | 393 | 2,936,974 | 552 | 3,048,054 | 307 | 2,998,793 | 341 | 2,684,941 | 294 |

本研究科の図書室は9号館2階の大学院生専用の研究室がある一角、75㎡の広さの部屋に設けられている。この部屋には1つのテーブルと6脚の椅子、それに検索用のパソコン2台が設置されている。所蔵図書は、本研究科の研究調査に必要な書籍を備えているが、大学図書館の蔵書と重複するものは、大学図書館において購入申請の際にチェックを行な

い、購入を認められない。またこの図書室の1階下に日本常民研究所の書庫があり、貴重本を蔵書する日本常民文化研究所の図書利用については、昼間は貸し出しを含めて全面利用できる。加えて、昼夜開講制による社会人の便宜を図るため、1週間に1日だけ20時30分まで図書の出納業務を行っている。購入図書の選定に関しては、できるだけ大学院生の希望が反映するシステムを導入している。休日、祝日などは、研究科の委員長に前もって届け出ておけば利用は自由である等、大学図書館を含めた3つの書庫によって研究に困らないだけの体制をとっている。

大学院生研究室6室をはじめ、共同研究室（大学院生が主に利用する1室）、図書室などの全体的な管理は大学（研究科委員長）で行っているが、その利用に際しては、各部屋ともテンキーを利用した大学院生の自主的な利用、管理に任せている。したがって、大学院生は時間に制限されることなく各部屋を利用できる。パソコンやコピー機など機器・備品の使用についても同様である。コピー機についても、年間1人当たり2,000枚の利用が認められている。

【点検・評価】

大学院生研究室として確保されている6室は、1室にそれぞれ8名ずつの大学院生が利用している。これら6室の大学院生研究室は、元来、教員の個人研究室であった部屋を利用したものであるため、1室を8名で利用するには極めて狭隘な空間であると言わざるをえない。その上、本研究科の入学定員は、博士前期課程20名、博士後期課程3名であり、収容定員では前期課程が40名、後期課程9名の合計49名となる。したがって、計算上でも、定員を充たした場合、1名分が不足することになる。本研究科では、開設以来多少の増減はあるものの、概ね定員を満たしていることから、年度によっては研究室が不足するといった事態も生じている。無論、留年した大学院生の部屋や机は計算に入っていない。

図書室も1室確保されているが、それらの収納スペースに限界が見え始めている。移動式書架の設置などが急務となろう。さらに、演習室が1室であるため、同じ時間帯の授業では、一方の授業を教員研究室などで実施しなければならないといった不都合も出ている。

機器・備品類については、質量とも不足な状況であることは否めない。例えば、パソコン12台のうち6台は機種が古いため、現在の情報処理機能に対処できない。さらに、大学大学院生の使用頻度が大きいため、利用に際して競合することもあり、新機種の入れ替えとともに台数を増やす必要がある。

【改善方策】

主たる学部を持たない大学院であるため、施設・設備面において全体的に不足・不備な部分があることは否定できないであろう。特に大学院生研究室や演習室の不足を解消するための方策を検討しなければならない。全学的な講堂不足に対応する諸施策が検討されはじめた中で、本研究科の現状を改善する措置がとられるよう提言を行う。

機器・備品については、マイクロリーダーやパソコンの中には旧式なものも混じっているので、最新の処理機能を有する機種に取り替えることが急務となるので、ヒアリングなど予算申請の過程で本研究科の現状に理解を求め、改善を図る。

日本常民文化研究所**【現状説明】****①9号館1階**

研究スペース 主に研究所の史資料整理室、書庫、会議室、閲覧室、事務室。

事務室兼史資料整理室（9号館11室）101 m²

閲覧室兼会議室（9号館12室）50 m²

書庫（9号館13室）101 m²

雑誌庫（9号館14室）50 m²

貴重書庫（史料含む）（9号館15室）101 m²

②3号館1階

一般市民及び学生に向けた公開スペース 主に展示室、実習室。

古文書修復室（3号館102室）30 m²

常民参考室（3号館103室）130 m²

展示準備室（3号館104室）130 m²

収蔵展示室兼実習室（3号館105室）260 m²

③21号館3階、4階

付置非文字資料研究センターの研究スペース

（21号館304・305室、2号館1-402・403・405室）259 m²

【点検・評価】**①9号館1階 研究スペース**

長 所

歴史民俗資料学研究所の昼夜開講制に伴い書庫及び貴重書庫の夜間開室を行い、利用の便宜を図っている。

問題点

会議室と閲覧室が兼用のため、閲覧体制が整っていない。また、所員の研究室や学生及び特別研究員、客員研究員が利用できるような共同利用スペースが確保されていないため研究及び教育環境の場としての充実がまだ不十分である。

②3号館1階 一般市民及び学生に向けた公開スペース

長 所

3号館102・105室に史資料の資料化と修復実習ができるスペースを設け、歴史民俗資料学研究所及び学芸員課程の学生に対して実習授業を行っている。本研究所所蔵の実物資料（古文書・民具等）を用いた実践的な実習授業は、史・資料を扱う専門家を養成する歴史民俗資料学研究所の大学院生、博物館等で資料を専門的に扱う学芸員課程の学生に対しての教育効果が高いと思われる。また、実習室、道具の貸出しも行っている。

3号館103室の常民参考室では、本研究所の研究成果を企画展示として公開しているが、ホームカミングデーや神大フェスタの開催時にはニーズが多い。また、近隣の公立中学校生徒と学生ボランティアとが協力して行う地域交流、校外学習の場としての利用があり、本研究所でもこうした新しい交流の場としての活用を進めている。

問題点

公開スペースとしての魅力的な案内看板等がないため、3号館がどのような施設なのか、一般市民はもちろん、学生にも存在が周知されていない。

年に一回程度の企画展でしか展示スペースとして公開されていないため、活用がま

だ不十分である。

収蔵展示室（3号館105室）には温度湿度管理が異なるマイクロフィルムと民具が同居しており、資料に対する保存環境は整っていない。

【改善方策】

現在、ほぼ上記のような形で各部屋を使い分けているが、施設の一元化ができておらず、活用率が非常に悪い。利用者にとっては、どこに行けば何ができ、何があるのかもよく分からない状況にある。

特に3号館の活用については、1階の3号館-101室を新たに学芸員課程準備室（大学博物館準備室）として位置づけ、3号館1階全フロアを常民参考室・収蔵展示室・史料補修実習室として有機的な通年活用を図りたい。なお、3号館を市民との交流の場としてバーチャル地球史博物館も含めて整備することも重要な検討課題と思われる。